

倫理的問いに答える真摯な現代中国論

丸川 知雄

中国の存在感が様々な側面で高まるにつれ、日本の一般市民が中国に関して疑問や不安に感じることが増えてきて

おり、中国を専門とする者は質問攻めにあわされる。「中国産の食品は危ないんでしょ?」「中国製品が安いのはひどい労働条件のもとで働かされている人が多いからでしょう?」我々は中国製品は安いと喜んでばかりいていいのでしょうか?」「中国経済のバブルはいつ崩壊するのでしょうか?」「TPPはアメリカによる中国封じ込めの作戦でしょ?」「一九八九年の天安門事件はどうして起きたの?」「劉曉波のノーベル平和賞受賞をどうとらえたいの?」「日本人の中国観はどう変化したの?」「ウイグルやチベットにおける民族紛争はなぜ起きて

いるの?」「村上春樹が中国語圏で人気あるのはなぜ?」

中国の何らかの分野に関する専門家であればこれらの質問のほとんど、またはすべてに対してこう答えるであろう。

「それは私の専門外のことでですので、コメントは控えさせていただきます。」実際、どの質問に答えるにも高度な専門性が要求されるので、良心的な専門家であればあるほど軽率にはコメントできないと考えるだろう。何でも回答してくれる人はおそらく何の専門家でもない人である。ところが、本書は中国の財政・金融の専門家である著者が上記の質問のすべてに対して真摯に取り組んだ希有な例外である。良心的な専門家である著者は、どの問題に関してもそれぞれに先達がい

梶谷 懷著

「壁と卵」の現代中国論

——リスク社会化する超大国とどう向き合うか



A5判 266頁
人文書院 [1995円]

ることを知っているの、必然的に本書は書評集の様相を呈している。紹介される本は著者の専門であるマクロ経済学のものから、歴史、政治、村上春樹研究に至るまで多岐にわたり、特に中国の近現代史に関する日本語による最近の研究書に関するブックガイドとしても読めるであろう。

本書のタイトルにある「壁と卵」というのはシステム（壁）とそれに翻弄される個人（卵）を比喻する表現として村上春樹が使ったものである。ただ、率直に言って本書全体でシステムと個人の軌轢というテーマが必ずしも一貫して論じられていくように読めなかった。おそら

中国年鑑 2012

◎5 月末刊行予定◎

中国研究所 編・発行

毎日新聞社 発売

1955 年創刊。現代中国に関するあらゆる分野の最新情報、基本情報を提供。

B5 判 約 500 頁

価格: 18,900 円(税込)

◆特集

2011 年に生じた温州高速鉄道事故、頻発する民衆騒乱から、中国の原子力開発、次期政権の課題など、さまざまな切り口から中国のいまを捉える論考を掲載。

◆動向

政治、対外関係、経済、対外経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、華僑・華人、香港、マカオ、台湾、国民経済・国民生活、財政、金融、証券・保険、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、文化、宗教

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2011 年日誌ほか

※お問い合わせは中国研究所事務局まで。

一般社団法人 **中国研究所**

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@icn-catv.ne.jp

URL: <http://www.chuken1946.or.jp>

く本書の本来のテーマである「現代中国論」をそのままタイトルとしてしまうことに対して著者は遠慮する気持ちがあつて、このタイトルになったのだろう。しかし、著者のように各分野の専門的な議論に配慮しながら「現代中国論」をまとめられる人はそうそういないのではないだろうか。

本書のなかでの印象的な分析をいくつか紹介したい。

中国の不動産バブルを論じた章で、著者は EU で起きた問題との類似性を指摘する。EU では通貨は統一されたが財政政策には各構成国の独自性があり、そのことがギリシャの放漫財政のようなモラ

ルハザードをもたらした。中国は金融のみならず財政も一元化されているが、地方の財政には中央のコントロールが及ばない部分がある。とりわけ地方政府が土地資産を利用して銀行などからの融資や出資を集めて不動産などに投資する「融資プラットフォーム」は隠れた放漫財政になっている恐れがあり、信用危機のリスクをはらんでいるという。本書を読んで、私は地方政府の「融資プラットフォーム」は、一九八〇年代に各地で設立され、一九九八年以降相次いで破産した国際信託投資公司 (ITIC) の再来ではないかと思った。ITIC のことを外国の銀行はソブリン (政府そのもの)

と誤解して (おそらく中国側がそう誤解させて) 積極的に融資し、ITIC は不動産などへの投資に失敗して破産し、外国銀行は債権を回収できなくなった。「融資プラットフォーム」はもっぱら国内から資金を調達しているようだが、やはり同様の誤解の構造があるのか、一九九〇年代の ITIC 問題と規模を比べたらどうか、といった疑問が湧いてきた。

国家と社会の関係における日本と中国の違いを、それぞれの貨幣の歴史と対比して論じた章も興味深い。端的に言って日本は国家と社会が近く、中国は遠い。日本では貨幣鑄造によって国家がシニョリッジ (貨幣の素材価値と額面価値の差に

よって貨幣を鑄造する国家が得る利益」を得る戦略が江戸時代以来功を奏しているが、それは国家が貨幣をその額面の価値で社会に通用させる力があるからである。一方、民国以前の中国ではそもそも単一通貨が成立しておらず、各地方の貨幣が競争的に使われているためシニョリッジの獲得ができなかった。一九三五年の幣制改革によってようやく通貨の統一が成し遂げられたが、その後すぐにシニョリッジによる戦費調達をやりすぎてハイパーインフレを起こしてしまう。つまり、国家の紙幣に対する社会の信頼を損ねてしまうのである。

「民主」と「ビジネス」の分裂について論じた章も、問題の整理のしかたに改善の余地があるとはいえ、重要な問題を指摘している。日中関係は従来「政冷経熱」の関係、言い換えれば外交関係は悪くても、投資や貿易はそれと無関係に熱く続けられる状態であったのが、二〇一〇年の尖閣問題の直後におきたレアアース輸出停止は、政経分離がいつまでも続

けられないことをあからさまにした点で、日本の経済界にとつて衝撃的な事件であった。いまや中国政府からウイグル民族運動の首謀者として追われる立場のラビア・カーデイルも、かつては中国政府や漢族社会と政経分離の態度で接して中国十大富豪の一人に数えられるほどの成功をおさめてきたのが、政経分離に限界を感じて抗議を始めたなら投獄されてしまった。これらのように、本来相互にとつて利益となる経済関係に政治の論理が介入して断ち切ってしまう問題に対して、著者の提言をやや乱暴に要約すれば、政経分離を続ける方策を考えるべきだということであろうか。なお、私が「政治の論理」と言い換えたことを著者は「民主」と表現するが、これにはいささか疑問を感じた。尖閣諸島やレアアースをめぐる日中の対立、漢族とウイグル族の対立などは仮に中国が民主主義国家であったとしても十分に起こりうる問題ではないだろうか。

中国の人権について論じる章では、民

中国発行の日本語月刊総合誌

人民中国

People's China 5月号

人民中国雑誌社 定価400円(税込)
[年間購読料4800円(税込)]

【特集】青少年が拓く中日友好新時代(連載) 中国共産党はなぜできるのか? ⑤なぜ世界第二の経済体になれたか?(下) ◆「3・11」中国大使館員の奮闘記

⑤互いの救助体制から学びあう ◆チャイナ・パワーを読み解くPart II ⑩「炒経済」と実体経済 ◆世界遺産めぐり ⑪浙江省杭州市・西湖を彩る文化的な景観 ⑫東南の仏の国・三宗教が共存 ◆中日を結ぶ新しい海の定期便「オーシャンローズ」号第一船に乗る ◆ほか

「人民中国」は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治、社会、考古、歴史、美術など幅広い分野の情報を満載。見本誌贈呈。
〒03-3937-0300 (東京書店)
二〇一〇年一月号より「人民中国」デジタル版をLingGooで販売しています。サンプル版の試し読み(無料)もできます。

<http://www.fujisan.co.jp/magazine/1385>

主活動家の劉曉波に対するノーベル平和賞の授与から説き起こす。この授与は政治的自由が制約された中国の現状に対する国際社会の憂慮を示すメッセージであつたが、中国はこれを「内政干渉」と断じ、自由権よりも生存権などの社会権が大事だという独自の人権観で対抗した。しかし、アマルテア・センが主張するように自由権と社会権は相対立するものではなくてむしろ表裏一体のものであり、自由権が制約された社会ではしばしば人々の生存権も脅かされるとすれば、国際社会が各国における自由権の状況に関心を持つのは当然のことである。自由権の問題は一国だけの問題ではなく、公共的性格を持つ「公共圏」の問題であると著者はいう。「公共圏」の概念についても少し解説が欲しいところだが、多くの専門家がコメントに詰まる微妙な問題について、本章は考え方の筋道を提供してくれる。

中国の少数民族問題について論じた章では、異民族の排除からスタートした孫

文の中華民族観が中華民国の成立とともに「五族協和」に変化し、下野したら今度は漢民族への同化主義を主張し、国共合作が成立したらコミンテルンの民族自決と妥協し、というように変化し続けたことを指摘する。孫文に典型的なように「中国人の境界」は政治の都合によって揺れ動き続けた。境界の内側に入れられたり外に排除されたりしたのがモンゴル、ウイグル、チベットなどの少数民族である。著者は少数民族の問題に対して一見理解のある左派の論客たちが、中国の民族問題の本質を階級関係や外部要因に帰することの安易さを批判し、当事者たちが何を語っているかにもっと耳を傾けるべきだと主張する。

以上まとめたように、著者の専門である経済に関する章では分析的に書かれているが、民主主義や人権、労働問題、民族問題、日中関係などに関する章では、中国で起きている問題を単に分析するだけでなく、隣国の日本に住む我々はそれをどうとらえたらいいのか、という倫理

的な問題として論じている。その点で本書は、現代中国の諸問題に関する専門家たちによる多くの解説書と一線を画している。そうした倫理的問いも含んだ中国論はこれまで専門家によって余り書かれてこなかった。その間隙を非専門家たちが埋め、私から見れば「悪貨が良貨を駆逐する」ような残念な状況になっていた。本書のような良貨が広く流通するとともに、他の分野の専門家たちをも触発してくれたらいいと思う。

(まるかわともお 東京大学)

